

第7期東京都生涯学習審議会
幼児・家庭教育専門部会 第3回

議事録

平成19年9月4日(火)
午後6時34分から午後8時27分まで
都庁第二本庁舎31階 特別会議室22

○出席委員

生重 幸恵 委員

坂井 一之 委員

鈴木みゆき 委員 (部会長)

高橋 武郎 委員

長澤 由利 委員

広瀬 宏之 委員

**第7期東京都生涯学習審議会
幼児・家庭教育専門部会 第3回 会議次第**

- 1 開 会
- 2 議 事
 - (1) 専門部会報告（案）について
- 3 その他
 - (1) 今後のスケジュールについて
- 4 閉 会

【配布資料】

- 資料1 専門部会報告（案）幼児・家庭教育専門部会における審議のまとめ
- 資料2 専門部会報告（案）
「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト展開（案）」
- 資料3 審議会のスケジュール（予定）
- 参考資料 専門部会長のまとめに向けて（メモ）

第7期 東京都生涯学習審議会 幼児・家庭教育専門部会 第3回

平成19年9月4日(火)

都庁第二本庁舎31階特別会議室22

開会：午後6時34分

【主任社会教育主事】 部会長が1時間くらい遅れるとの事ですので、いらっしゃるまで事務局の方で委員の方々御意見をお聞きしながら進めたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、ただいまから第7期東京都生涯学習審議会の第3回専門部会を開催させていただきます。

今日は全員御出席の予定になっております。部会長と香月委員とは少し遅れます。また、鳩山委員と太田委員がオブザーバーで参加の御予定なのですが、お二人とも仕事が終わってからということで、遅れていらっしゃることになっています。なお、今回も都政新報の記者の方が同席されていますので、どうぞよろしく願いいたします。

次に、本日の進め方ですが、御用意いたしました資料を御説明したあと、皆さんに御意見をいただき、最後に部会長に簡単に整理していただくことになっています。部会長とは事前に打ち合わせをしてありますので、このまま進めていきたいと思っています。

まず資料を確認いたします。会議次第と座席表、資料1、資料2、資料3がございます。それから、参考資料として「まとめに向けて」という前回部会長から出された資料、以上がございますので、御確認ください。

これまで、第1回の専門部会では、幼児期の教育をテーマに、主に0歳から6歳までの乳幼児の教育と家庭教育について審議いたしました。第2回専門部会では、6歳以上の学齢期の家庭教育、また親になるための準備教育について審議いたしました。今日は以上の2回の審議を踏まえまして、第2回全体会に向けて、この専門部会における審議についてまとめる作業をしていきたいと思っています。

まず、資料1「幼児・家庭教育専門部会における審議のまとめ」について御説明させていただきます。「1専門部会における審議の枠組み」については、『子供の発達メカニズム』を中軸にすえる」ということを確認し、議論をしてきました。それを図にしています。こ

の、「子供の発達メカニズム」に関する理解を中軸にしながその成果をまず親の力量形成に反映していくという観点と、それから地域コミュニティにおける教育支援に反映させていくという観点で御審議いただきました。

また、(2)の『乳幼児期からの子供の発達』に関する『教育支援』の観点では、まず1つ目、学童期・思春期段階での子供の諸課題への対処ではなくて、乳幼児期からの教育としての予防的な観点、2つ目、乳幼児期からの子供の育ちをトータルに支援するという観点が挙がっています。これについては、以下の①から③について御審議いただいたかと思ひます。

次に、2の「審議の要点」です。これまで皆さまからいただいた御意見をダイジェストにまとめてみました。これまでを振り返る意味で、簡単に御説明させていただきます。

まず、「Ⅰ子供の発達メカニズムを踏まえた教育のあり方」について、広瀬委員からレクチャーをいただきながら、御審議いただきました。「『発達』に関する新たな知見」ということと、「『乳幼児期からの子供の教育支援』のあり方」ということが出されています。最新の科学的知見というところに注目されているといういろいろなお話も伺いました。

次に、これを軸にしなが、「Ⅱ親の力量形成に重きをおいた家庭教育支援のあり方」について御意見をいただいています。親と子供の現状についても様々出されましたが、ここで触れさせていただきたいところは「力量形成」の部分です。あくまでもダイジェストですが、1つ目にありますように、「乳幼児期からの子供の発達に関する科学的知見を情報提供することは有効であった」ということで、子供の生活習慣などの実践も含めて、この点で御審議いただいています。同じく子育てに関心のない親（保護者）を視野に入れたアプローチが求められているということや、親のニーズに対応したきめ細かなプログラムを提供する必要があるということが出されていました。そして、力量形成は出会いや参加、交流などの多様なかわりを通して図られていくことが重要であるということが出されています。また、小・中・高校生向けの「親になるための準備教育」の重要性も出されたかと思ひます。

そして、「Ⅲ乳幼児期からの子供の発達を支える地域（コミュニティ）における教育支援のあり方」。ここでは、「ネットワーク」として、地域の関係機関相互の連携を図っていくことや、保健師、保育園の先生などの専門職による乳児期からの教育支援の参画を促していくことの必要性を挙げています。

また、「多世代の参加」として、地域の育児経験者や団塊の世代の方など、多世代の参加

のもとに進めていく必要があるということが出されています。

最後に、「多様な場」ですが、「乳幼児期からの教育支援」を推進する場を設ける必要性があること、場の設定を実現するための担い手（ファシリテーター）が必要であることなどが出されました。

具体的なお話がいろいろ出されましたが、要点として、以上のようにまとめてみました。

右側に「別紙 乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト展開（案）」とありますが、それが次の資料2です。この（案）は、これまでの審議内容をもとに事務局で検討し、作成いたしました。今日は、この資料2について御意見をいただければと思っています。

資料2について御説明いたします。この「教育支援プロジェクトの展開（案）」では、都レベルの取組と、区市町村レベルの取組に分けてお示ししておりますが、都レベルで4つ、区市町村レベルで2つ、全部で6つの施策を提案しています。

都レベルの取組のうち、（1）から（3）まではプログラムの開発になります。（1）は、教育関係者や保育関係者向けの研修資料やプログラム作成、それから保護者向けの教材とか、啓発資料の作成の必要性など、その作成の施策です。

（2）は、親・保護者の力量形成のためのプログラムの作成、（3）は乳幼児期教育ファシリテーター、先ほどのファシリテーターのプログラムの作成ということを考えています。

これに対応して、市町村レベルの取組では（6）として乳幼児期のファシリテーターの養成、人材育成の要素を入れています。

また、（4）はウェブサイトの運営など、情報を発信するものです。

（5）の「地域で『子供の育ち』を支える取り組み」を御覧ください。先ほどの審議のまとめにありましたように、「乳幼児期からの教育支援を推進する場を設ける必要がある」ということですので、これへの対応策として地域における「乳幼児期からの教育支援」の取組の具体化を図っていくということで、プログラムの開発などを踏まえて、数地区でのこの取組の試行的な実施を検討しています。

これについて例えば実施地区の選定の考え方、試行的な取組の内容、あるいはどのような実施体制づくりを進めるか、どのような実施方法を選択するかについて御審議いただきたいと考えています。実施体制も地区によって様々だと思います。専門的立場の方たちのネットワークを軸にしながら体制をつくっていく形や、NPOが活動しているところではそういうところを軸にしてという御意見もあったかと思います。また、どのような実施方法を選択するかということにつきましても、6つほど観点を挙げてありますが、この辺に

についても少し詰めた審議をしていただければと思います。例えば、最後のファシリテーターの役割のところでは、ファシリテーターとしてどういう人材を求めるかということについても、いろいろな御意見があったかと思います。保護者・親に寄り添うような立場の方という御意見もあれば、ソーシャルワーカー的な、スーパーバイザー的な方ととらえるようなこともあったかと思いますので、その辺についてももう少し御議論いただければと思います。

このようにプロジェクトの展開につきましては、都の役割として行う、プログラムの開発を通して、「(5) 地域での試行的な取り組み」を行い、そのことを広めるためにも人材の養成や、情報発信を行っていくという案になっております。

資料の説明は以上です。

では、まず、資料1の「専門部会報告(案)」につきまして御意見をいただきたいと思えます。1点目が審議の枠組み、2点目が審議の要点について整理していますが、これについて何か御意見はございますでしょうか。全体会で報告をするに当たって、これで理解しにくいのかどうか、というような観点からでも御意見をいただければと思います。

【高橋委員】 1点、よろしいでしょうか。確認ということになるかと思うのですが、審議の要点の「I 子供の発達メカニズムを踏まえた教育のあり方」の1つ目に『発達』に関する新たな知見」というところがございます。「新たな知見」、あるいは「最新の科学的知見」はそれとして、従来からある大事な知見については、どこで盛り込んだり、情報提供するのだろうかという疑問を持たれることがあるかと思うのですが、それはどのように解釈、あるいは説明すればいいのか、自分が今質問されたらどう答えようかなと思ったものですから、そこをもし教えていただければと思いました。

以上です。

【主任社会教育主事】 新たな点だけではなくて、これまで大事にされていたところで、その辺のまとめ方としては、広瀬委員、どうでしょうか。

【広瀬委員】 ここに書いてあることがそのままいいのかなと、僕は単純に思っていたのですが、新たではない知見というのは、従来の大人側からの視点としての運動発達、それから言葉の発達に代表されるような心の発達です。新たな知見というよりは「新たな切り口」と言った方が本当は正確なのですが、その辺はセールスポイントとして「知見」とあえて入れていただいたのかしれません。それとは別に、子供の立場に立った発達として感情の切り口というようなまとめ方を私としてはしているつもりなのですが、お答えに

なっていますでしょうか。

【事務局】 その文の中では「…加え」というところまでですね。当然従来からの知見が入っているというつもりで書いています。

【主任社会教育主事】 1行目の「運動発達、心の発達に加え」ということになりませぬ。

【広瀬委員】 そうですね。もっと古めかしく言えば、運動発達、精神発達という言い方をしますので、古い雰囲気を出すのなら「心」という言い方は少し柔らかい、新しい雰囲気があるやもしれませぬ。精神発達と書いてしまう方が「従来の」という雰囲気は少し出るかもしれませぬ。単に言葉のあやですけれども。

これも前にお話はしたと思うのですが、人間に対する何か新しい知見が見つかったというよりは、現場でそれぞれ皆さんが身をもって体験されていたことをただ単に少し系統立てて、再構成して、新しい概念として作り上げたのであって、ゼロが1になったわけはありません。整理してこういう切り口にしたという意味で、「知見」よりも「切り口」という方が本当は正確に反映しているのかなという気はするのですが。

【主任社会教育主事】 審議の枠組みの（1）の点線で囲んだところにも、これまでの「専門的知見の蓄積を裏付ける」ということで位置付けていますので、今の形で報告させていただければと思います。よろしいでしょうか。

【高橋委員】 わかりました。

【事務局】 もう少し言葉の使い方を丁寧にします。要するに、全く新たなものが発見されてそれをやるのだという誤解をされないような配慮をした方がいい、ということですのでその点については事務局で工夫させていただきたいと思います。

【広瀬委員】 別のことでよろしいですか。

【主任社会教育主事】 はい。

【広瀬委員】 1の（2）「乳幼児期からの子供の発達に関する」の項目の1行目で、「学童期・思春期前期での子供の諸課題への対処ではなく」とありますが、「対処」という使い方しているのは、課題というよりも問題というとらえ方をされているのでしょうか。問題が起こってこないように乳幼児期から教育の中で予防するという意味でお使いになっているとしたら、少し意味が狭いような気もするのですが。

【主任社会教育主事】 そういうつもりで使っていますので、ここも少し言葉を足してみます。

【事務局】 例えどどういふ観点でとらえてみるとよろしいでしょうか。

【広瀬委員】 例えど学童期や思春期で子供、青年がちゃんと今までの発達のステップを上がってけるようにするために、足を引張らないように、ということです。足を引張った結果としていろいろな問題行動が出てくるので、足を引張らないように、子供の持っている発達の力をちゃんと伸ばしてあげるようなかわりをしてくださいという、これは僕の意見になってしまいますけれども、そのような意味合いなのです。「予防」というと、問題が発生しないように予防するという悪いイメージが強くなってしまふので、もちろんその観点も大事だとは思ふのですけれども、もうちょっと緩やかに、広めにとつてもらえないかと思ひます。その子が持つ伸びる力を十二分に生かしてあげられるようなかわりを、乳幼児期からしてもらえないかなというのがささやかな願ひです。ちょっと漠然としていますが、そんな感じではす。

以上です。

【主任社会教育主事】 今のような広げ方で、少しこちらでここを訂正してみたいと思ひますがいかがでしょうか。その辺はよろしく願ひいたします。

そのほかにございますか。それでは、この資料1については、今御指摘いただいた部分を直して、報告の資料にしたいと思ひますが、他にどうでしょう、もう少し御意見をただけますか。

【長澤委員】 すみません。重複いたしますが、(2)にある「予防的な」という言葉、これは非常に引かかりました。子供は育つ力、メカニズムを備えています。問題は育てる環境、1番には親ですね、保護者の方により多くあつて、悪気はないけれども結果的に子供の成長を阻害してしまつているというところが現状なのですから、ひとくくりにして「予防的な」と表現してしまふのは少し危険だと思ひます。よろしく願ひしたいと思ひます。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。他はいかがでしょう。坂井委員、いかがですか。

【坂井一之委員】 例えど「準備的な観点」、「準備」というと軽くなつてしまふかもしれないけれど、言葉としてはそういう使い方もあるのかなという感じはします。

【主任社会教育主事】 そうですね。

それでは、資料1はよろしいでしょうか。

続いて、資料2について検討したいと思ひます。この専門部会では、乳幼児期からの子

供の発達に関する理解を啓発することや親としての力量を^{はぐく}育むことを、単に情報提供や学習の場の設定によるだけではなく、地域においてさまざまな出会いや交流の場を生み出すことを通して実現する、そのさまざまな可能性について御意見をいただいていたといえます。これまでの審議の流れを受けて、資料2のプロジェクトの展開を作成したつもりでいます。

まず、資料2について質問をいただきながら、理解を深められればと思います。どなたからでも結構ですので、御質問いただければと思います。

【事務局】 事務局から補足させていただきますと、この（案）は、こういう切り口で都と市町村が連携して取り組んでいったらいいだろう、という枠組みをやりわりとつくったというだけなのです。ですから、こういう観点をもっと取り入れるべきだろうとか、こういうやり方ができないものかというものを具体的に、特に生重委員や、高橋委員、長澤委員には現場の状況を踏まえながら、御提案をいただけるとありがたいと思っております。特に地域レベルの取組については、置かれている地域の状況というのは、例えば保護者の方たちが中心になってサークルをつくって活動をどんどんやっていくという形がいい地域もあり、専門機関の職員あたりがその部分の底上げをしていきながらやっていかなければいけない地域もあるし、社会資源の状況や、住民の主体的な力量などもそれぞれ違います。そういうことを踏まえた取組の計画が必要になってくるだろうと思われまますので、そういった視点も踏まえて、自分の地域に引きつけながら、御提案いただけると大変ありがたいと思っております。

【主任社会教育主事】 それでは、プロジェクトとしては（1）から（6）という項目を挙げてお出ししているのですが、今話もあったように、どちらかという（5）の「地域で『子どもの育ち』を支える取組」に焦点を合わせながら、御質問、御意見合わせて出していただければと思います。今ありましたように御自分の地域に引き寄せた形で、御意見をいただければと思います。

突然ですけれども、生重委員、いかがでしょうか。

【生重委員】 私、昨日、水戸へ、乳幼児の活動の現場にいる方たち向けの研修会の講師として行ってまいりまして、お話が終わった後にいろいろな現場の悩みなどをお聞きしてきました。いろいろ私からお話をさせていただいたら、スタッフのお一人から、「これ以上言ってこの人が来なくなったらどうしよう。」と、すごく不安に思うことがあるという発言がありました。もちろん私もそう思うのですが、現場にいると、いいもの、いいもの

のと押しつけてしまいがちになってしまい、そうすると若いお母様たちは窮屈に思うようで、「来なくなったらどうしよう」というように感じることも起きてしまいます。言い方はとても難しく、一番悩むところです。

6時まで水戸にいていろいろな話をしてきたのですけれども、おもしろかったのはその会場です。木造の平屋2DKの一戸建てに、助成金でログハウスを横に建て、大型の車が置けるような駐車スペースには支援を受けて安全な砂を入れ、子供さんたちの砂場をつくってありました。ログハウスと木造の家屋の間は、支援者のリフォーム会社がつくってくれた渡り廊下でつながっていました。そんなに広い一戸建てではないのですけれど、小さなお子さんがトコトコ走って転んでも危なくないようにしているし、先輩がきれいに使って要らなくなったおもちゃが、ことに家庭には置きにくいような大型のものが、たくさん置いてあるのです。そして子供が気に入ったら、1週間程度の貸し出しもしてくれることになっています。

また、その太っ腹な大家さんが、20台も30台も置けるような駐車場も含めて無料で貸してくれているので、そこに車で乗り付けることができます。曜日によって、今日はゼロ歳、今日は1歳から2歳までとかというように決めたりもしていました。

今後もしできれば県と話し合っ、もっと大きなスペースで、子供たちが転がったり、走り回ったりできるような月1のわんぱく広場みたいなものもできるといいですねというようにお話もしてきましたが、水戸では、児童館は1館しかなく、公民館は異世代交流の場としたいというのが行政の考え方らしいのです。現実には公民館はお年寄りの利用でいっぱい、なかなか広いところに飛び出すことはできないようです。だから、委託を受けたNPOさんがその大家さんの好意でその家を無料で借りて、そういう活動をしている状態です。もう一つの団体は県の施設を使って活動なさっているということでした。

東京都、例えば私の住む杉並区などはそれに比べればずっと便利で、児童館があつて、私が子供を育てていた頃にはみんなそこに集まって、当番で子供を遊ばせる班がいて、それ以外の班の人は勉強会をすとか、子供のための誕生会パーティーの製作物をつくるとかいろいろなことをやってきたのですけれど、今はそういうところが地元の杉並でも希薄になってしまいました。今でも熱心に活動している方たちはいるのです。それなのになかなか広い交流の場になっていかないのは、そこにいる方たちが2層に分かれてしまうからです。つまり、今にでも社会復帰したいぐらいのキャリアをお持ちで、仕事をバリバリやってきて、今はお子さんを育てているから社会とつながるための情報入手のために子育て

サイトを立ち上げて、行政と連携しながら、赤ちゃんや小さい子を育てている人たちの情報サイトまでつくっているというような人や自分が仕事復帰するときのことを考えてより現場に近い社会性のあるところにいる人として、他方、そういうものすら全く見ないという人とは別れてしまっているようです。

ですから、アプローチのかけ方も、昔は1通りでよかったですけれども、今の子育て世代の御両親に向けては多様にならないといけないのかなと思います。「勉強なんかしないでいい、インスタント食品を食べさせてもいいからおいで」というところから始めていくようなものと、逆に乳幼児のときからきっちり育て決して洋服を水でベチャベチャにさせない、というような人たちにはもう少し自由に、子供なんてベチャベチャになったり、泥んこになったりしてもいいのだよという、そちらの方にアプローチするものと、本当はもっと細かくあったらいいのですけれども、大枠で3つぐらいのタイプのイベントとかお誘いをしていくしかないかなと思います。「もっと気楽に来てもいいんだよ」という場所を、児童館のほかにももう少し考えた方がいいとも思います。

自分の地元の話をしなさいということでしたのでお話ししますが、うちの区は公民館がなく、地域区民センターという所が公民館的な役割を果たしています。7つ大きな館があるのですが、他に2つ小さな集会所的なものがある、そういうところで民生・児童委員の人がいろいろな専門家を招き、赤ちゃんを抱えているお母様方を招いて、自由にお話ししましょうみたいな会をやっていたりもするのです。でも、どうしてもかたい、はめ込み感があるようです。自分たちの方から集まりたいと言い出してできるというような形ものをどうやってつくってあげればいいのかと考えていますが、まだ具体的にこれといったいい案が出てきません。

その水戸の施設では、中高生のボランティア、職場体験を受け入れていて、中高生向けに赤ちゃんに触れ合うときにこういうことを注意してほしいということをまとめて冊子につくっていて、学校からの依頼や、個人で行きたいという人たちに渡しています。中高生向けなので後半には「生まれてから1歳まで」というページや「勉強コーナー」があって、赤ちゃんに触れて、抱っこもして、直接知ることでもできるけれども、実は赤ちゃんって今こうなのですよ、こんなふうに発達していくのですよというようなことが書かれています。

今後職場体験に行かせたり、そういう場に出したりするときに、うちも中高生にこういうものを配れるといいなと思って、参考資料としていただきました。

この畳の部屋でやっている子供たちの雰囲気はすごくよかったです、どこかそういう場

所を貸してくれたら、そういうことをやってくれる団体を探してきて、一緒にできたらいいなと思って帰ってまいりました。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。

今の御発言の中で多様なアプローチの仕方が必要であるというところで、3つの枠と言われましたが……。

【生重委員】 例えばごくごく平均的に小学校に入ったらパートでいいわという人、仕事の最先端のところを忘れたくないから早くに現場に戻りたくて、子供にはどんどん大人になりなさいと要求する傾向にある人、それこそ閉じこもっていて、食事はインスタントで子供のことにあまり関心のない人と、その3つぐらいの段階に応じた場を設けていかないと、いろいろな人たちとはつながっていかないと思います。

現場では、専門家の長澤先生や広瀬先生が聞かれたら本当に「えっ!?!」と思うような次元のことでスタッフの人たちが困っていたりしているのです。そして、その方たちもほぼ無料に近い形で毎日専従でやっていて、いろいろ悩みや問題を抱えていらっしゃいます。

そういう中で、続けていかないと意味がないことですよね。都の施策だから1年だけやって、この1年だけかかわってくれた人には予算がつきますが、それ以外のときにはどうぞ御自由に御解散くださいとか、勝手にお続けくださいということでは困ります。子供は延々に、エンドレスに生まれてくるわけですから、子を大人にしていくという社会がきちんと健全に機能していなくてはいけないわけで、そのために大人がどういうふうに参加していき、子供たちの未来を支える地域の担い手となっていけばいいのか、続けていける体制を最初から考えていかなければなりません。

このファシリテーター養成についても、あまりにも専門家ですばらしい方だけではなく、本当にごくごく身近な人もというように、ファシリテーターの側も3段階あって、身近なファシリテーターは専門家にもアドバイスがもらえるみたいな、両方の場が3段階になっているという——今例えば3つということ、5段階かもしれないですが——そういう形で、かかわってくれる人も養成していくし、場もつくっていくといったことをしていかなないと、私たちがいろいろ話していることが現場の若いお母様やお父様たちに届かないかもしれないという気がしております。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。

今、「地域で『子供の育ち』を支える取り組み」というところでお話をいただいたのですが、高橋委員、いかがでしょうか。

【高橋委員】 これまでも皆さんの御意見等を伺いながら、私の立場からすると、学校として何をどこまでできるのか、やらなければいけないのかということで考えてきたところです。(1)(2)(3)のさまざまな教材や学習プログラムが作成され、それを含めたカリキュラム的なものができた後、小・中・高における準備教育の実施を進めるとすれば、上のモデル地区なり、幾つかの地区の中から、あわせてモデル的な学校教育の取組を進めるようなところ、あるいは積極的にやっていただける学校があればそこをモデル校として進めていくというのが一つの考え方になるかなと思ったところです。

選ばれた数地区での実施と、モデルとして行う学校との連動性をどのように考えていったらいいのかということになりますが、かなり共通性があり、連動していくので、その選ばれた地区の中でやっていくのが一番いいのではないかとこのところまで、今考えているところです。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。そのほかに、この(5)に当たる「具体的な展開」のところで御質問とか、御意見が何かございましたら。

【坂井一之委員】 よろしいですか。地域の取組ということだと、幼稚園とか、保育園とか、今ある施設とか、児童館とか、そういうものを利用するということだと思っておりますが、いろいろなツールをどうつくるかというのは、誰がそれをやるかという問題はあるとは思いますが、比較的簡単にしてくれると思うし、いろいろアイデアは広がるころだと思っております。それとは別に、我々がまだ、多分都の方もそうだと思いますが、つかみ切れていないインフラが実はあるのではないかと思います。例えばNPO、さっき話しましたけれども、ネット上でも子育て支援サイトというのが様々にあります。行政が全部つくろうとすると、ゼロからやって結局息が切れて終わってしまうので、インフラに対する支援つまり子育て支援のために志を持ってやっているところに対して、例えばツールの欲しいところにはツールの支援もするし、あるいは何か企画なりアイデアとか、講師の派遣をしてもらいたいということであればその支援をするというようなことはどうでしょうか。区とか、都とか、公民館とか、そういう既存のところではないところでいろいろ繰り広げられていると思うのです。見ていると子育てサークルというのはたくさんあります。それこそ子供を持った勢いでつくっちゃう人たちもものすごく多いので。そういう人たちに都の持っているインフラ、あるいは支援の仕組みを利用してもらおうとか、そういうサークルをうまく活用するとか、あるいは既存の自前でやっていくとか、目に見えている範囲のものでいろいろな新しい仕組みを工夫していくとかいろいろ組み合わせて多層的にやってい

った方が、実効は上がるのかなという感じがします。ウェブサイトなどもそうですけれども、いわゆる通常の子育てサイトというのはどこが作っても同じようなものになってしまうのですけれども、既存の子育てサイトとの連携とか、あるいはそこへの大きな支援とか、まとまりみたいなものとか、そういうものをウェブサイトで行っていくとかというような大きな仕組みみたいなものを考えていった方がいいのかなと思うのです。

いろいろツールをつくって、協力できる現状の機関の中でいろいろな形でいろいろな場をつくり、やっていくことがまず中心だとは思いますが、他方で民間の中に眠っているインフラとか、いろいろな試みとか、あるいは志のある人、そういうところを拾い出して行って、そこもサービスのリンクをしていくというような視点も大事なかなと、少し大きな話になりましたけれども、全体の取組を見ていて感じたところがあります。

子育てサークルは、昔はよく本にサークルの情報を載せたのですが、最近は本が出たころには解散してしまっていたり、ということが多くリスクが大きいのでなかなか紹介はできないのですけれども、そういう中でも頑張っているところというのはありますので。

【生重委員】　そうですね。私もずっと続けているところを幾つか知っていますが、多くは自分の子はその時期を過ぎると解散してしまうのです。もめて消滅してしまう場合もあります。

【坂井一之委員】　そうですね。

【長澤委員】　消滅が本当に多いですね。子供同士がけんかする時期になると、親同士がだめになってしまうのです。そういうところが多いです。

保健所は皆さんが必ず行くので、そこから同じ子を持ったサークルをつくるというケースがとても多いです。自分たちでサークルをつくるのだけれども、続けていくには今言ったそこがネックになっています。子供同士のけんかなのに、親同士が自分自身の痛みとして感じ、集まりに行かなくなったりすることが確かに多いのです。そういう部分を行政的に言っても、保健師さんは保健所でもサークルを作ることはいいよって言うのだけれども、では、そのあと、区内にはこういうところがあるよというふうにつないでいくかという、そういうものは何も持っていないのです。だから、サークルは線香花火のように百花繚乱で、すぐに消えてはなくなっているような現状があると思っています。

ちょっと長くなりますが、子育てサロンというのは今非常にニーズが高いということで、いろいろなところでできています。最初は、例えば保育士を卒業した方、園長を卒業した

人たちをスタッフにして、そこで「お母さんもっとこうしなさい」と教えちゃったら、みんな来なくなっちゃったのです。それで、教えるということは望んでいないのだということで、今ではあまり立ち入らないとか、やたらに介入しないとか、教え込まないとか、そういう研修を受けてやっているの、利用者数が非常に上がっています。ただ、そこも、来てけんかして、別れて、来なかったり、ということもあります。お母さんたちもきちんと力を持っているのだから、それを引き出して、主体になってやっていくようなアドバイスをすればよいのですが、それが無いのです。

でも、お母さんたちは何か触れ合いを求めているということは事実です。これに対し民生・児童委員の方もいろいろやったださるのですけれども、やはりどうしても「面倒を見てあげなきゃいけない。これは私の使命」と思ってしまう感じがあるので、そういう形を嫌うお母さんは「嫌」となってしまうという限界があります。

ですから、この前おっしゃった、遠い大先輩ではなくちょっと近くて、「もうすぐこの時期になるよ。」「この2歳、3歳は悪魔の時代だというのだけれども、もうちょっとすると待てるようになるよ。」とか言ってくれるような、共感できるようなファシリテーター、寄り添い型のそういうものがが必要です。そういうお母様達自身の中からリーダーをつかっていけるように、場と人材、それとあとはつないでいく、いろいろなところにいるお母様方をつないでいく何か、何か出てこないのですけれども、今必要なのかなと感じています。

【坂井一之委員】 小児科医などでもいろいろな相談に応じたり、あるいはそこに来る患者さん同士で、ちょっとした勉強会をやるからいらっしゃいみたいなことをしている所もありますね。

地元の総合病院も含めて小児科は必ず行くところなので、そういうところの先生方たちは大変だと思うけれども、診療以外の何らかの形で逆に行政に対してお手伝いをしていただけるといいですね。3分診療でできない部分を違った形で先生方に御協力いただくとか、そういうことはあるかもしれませんね。

【生重委員】 我々が言ったり、身近な人が言ったりするより、お医者様が言うというのは効きますよね。

【広瀬委員】 地域のことで言うと、横須賀市というのはおもしろいシステムをとっています。数字に関してはうろ覚えなのであらかじめお断りしておきますけれども、横須賀市は人口が43万で、年間出生数が約2,500です。保健師さんが、確か50人ぐらいいます。ということは、1人の保健師さんが大体50ケースぐらいの母子を担当できるので

す。その保健師さんが、担当が決まっているかどうかは別として、3歳児健診、4歳児健診ぐらいまでずっとフォローして、健診の場がいろいろなトリアージ（治療の優先順位）、仕分けの場になっています。健診の場で発達が遅いと判断されると、2次健診、3次健診、病院とつながっていきます。そのうちにサークルができることもありますし、健診の場でサークルをつくりたいというお母さん方もいるので、双子サークルというのがありますけれども、自主的なお母さんたちの集まりに場を提供しています。横須賀には4つ保健所があるのですけれども、保健所の部屋を安い料金で利用させてあげて、ポスターも掲示してあげてというように、そこで子育てサークルの場を提供しています。保育士さんも、保健師さんもリクエストにより入ったりしてやっています。

確かそのような子育てシステムを横須賀はつくっています。健診という場はかなりの人が行くので、その保健所とタイアップすればある程度網羅はできます。システムとしてかたいシステムをつくらず、そこで申し出があったお母さんたちにこんなことが提供できますよという、もちろんそれは希望だし、1か月でつぶれてしまってもちっとも構わないし、やってみませんかというような、そういう情報提供をする場があるといいと思います。

【主任社会教育主事】 先ほど生重委員が言われた、自分たちから出てきた「集まりたい」という希望を、受けとめるようなことですね。何かをつくるというよりは……。

【生重委員】 そう。もう一步進めて、「集まりたい」という気持ちにさせたいですね。

今うちの区は、子育て応援券というものが2万円と5万円の金券として発行されています。

私の所では、小さい子に体を動かすアプローチをかける場をつくるとか、絵本作り講座とか、いろいろなことを考えてはいるのですが、若いお母様たちの券の使用動向を何となくうかがっていると、今ナンバーワンは一時預かりです。ただ、一時預かりする場所があるというのはすごく大事なことで、だから、そういう一時預かりの応援券に登録してくださっているNPOがやっているところや、民間の保育施設に、もし今後こういう企画ができれば、チラシとかを置かせていただきながら、何となく勉強会ができる雰囲気をつくるか協同を図っていく必要があるでしょうね。

子育て応援券については、乳幼児のお母様方が応援券を使える対象となる団体はあらかじめエントリーしていなくてははいけないのです。券を使える場所としてエントリーする団体向けの説明会に行ったときも、企業の方もいらっしゃいますし、私どものようなNPOもおりますし、大変多くの団体が参加していました。ただ、そういうところとの情報が、

今年始めたことなので、まだ全く上がってきていません。今年1年終わったところで、もっと具体的なものが出てきたら、もっとここに参考になるようなものも、皆さんの動き方として出てくるのかと思っています。

この秋からは、小学校を使って、3歳児から小学校の3年生と一緒に体を使って遊びましようというキャラバン隊を始めます。ある小学校のオープンスクールで、小さい子連れられてもいいし、小学校に入るお子さんが小学校を1日体験する。お母さんたちは小学校って、こういうところよと勉強するみたいな、そういうのも、昨年つくった「そうだよっぱり早起き早寝」を中心としたような取組も徐々に広まりつつあるので、高橋先生がおっしゃったみたいな小学校に月に何回か小さい子がやってくる日があるとか、連携したモデルケースになっていくと、結構広がりのあることができるのかなと思います。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。

鈴木部会長、いろいろ大変なところを駆けつけていただいております。

今、(5)の「地域で『子供の育ち』を支える取り組み」の具体的なものについていろいろ御意見を伺っていたところです。

まず、親へのアプローチの仕方についてですが、多様なものを考えないといけないのではないかということが出されています。今生重委員が言われた3パターンというのは、子供へのかかわり方の程度あるいは親の状況にはいろいろな段階があるだろうと考えられるので、3つくらいのパターンに分けてかかわり方を考える必要があるという意見です。それに合わせてファシリテーターも、身近な人とかかわりから、かかわってくれる度合いも含めて、3段階なのか、5段階なのか、1つのパターンではなくて、かかわり方も多様にできるような人材が必要なのではないかという御意見も出されました。

また、行政が、公民館とか児童館で、お母さんたちが集える場を設定することも必要でしょうけれども、既に目に見えている部分だけではなくて隠れた部分の活用、支援も必要ということで、さまざまな子育てサークルなども、生まれて消えてという問題はあるとしても、ある面では把握して、資料2の(1)から(3)にあるプログラムの開発などで作成されたものについても、そういうところで活用していけるようなつながりとか働きかけを、行政がしていく必要があるのではないかということも出されています。

それから、もう一つは、自主的にできてくる母親の集まりを尊重・支援していく必要があるのではないかという御意見です。例えば産婦人科の医院の中には、そこで子供を産んだ人が集まっていろいろな情報交換ができるような機会や場所を設けていらっしゃるお医

者さんもいっちゃれば、保健所が、健診の場でつながった親の方たちにそういう機会を提供しているようなものもあります。そういう親の方から必要として出されてきた要求について受けとめ支援していくようなものも必要ではないかということが出されていきました。

もう少し具体的な言い方で皆さん委員さんから出されていましたが、そういう御意見の中で、この（５）を審議している途中です。

ここで司会を交代させていただきますが、よろしいですか。

【鈴木部会長】　そうですね。おっしゃるとおりで、３パターンになるのか、その３パターンも地域に合わせてニーズも違うだろうと思いますので地域によるのか。私などはこういうことを考えるときに「冰山だな」と思うのですが、見えている部分は、わりとみんなかかわろうとしたりいろいろするのですけれども、実は支えているのは波の下にあります。先ほどおっしゃったように、行政はこの支える部分なので、それぞれの地域の実情に合わせてながら、例えば本当に具体的なプログラムの開発を、氷山の核になるようなものの開発を、まず、していくということも大切なのではないかなと思います。

【生重委員】　長澤先生がさっきおっしゃっていたことで、私もとても気になっているのですが、お母さん同士がすぐけんかをしますね。子供が小さければ小さいほど、親同士はけんかするでしょう。「けんかしたらどうして仲直りをうまくできないのか。」みたいなことを、私はお話の演題にしたりしますが、そのくらい多いです。これはお互いが、人と人との触れ合いをすることは大切で、多少泣いたり泣かされたりすることは育ちの上で大切だということを納得できていけばいいわけではないですか。公園とかそういうところに集まっている人たちの、離れたりくっついたりする様子を見ると、何とかできないものかいつも思っています。

そして、最近のお母さんたちはそのまま小学校に来るのです。そして、「どうもあの人は合わない」とか、「何となくあのファッションは気に入らない」とか、ものすごくくだらないところで派閥みたいなものができ上がってしまうことがあります。子供を育てていく場としては、特に小学校に上がったら、大嫌いなお母さんの御家庭の子供であろうが、同じクラスの仲間なのです。その子たちは気が合おうが合うまいが、一緒に学びの場で何かをやっていくのだということを、小学校になったらお父さん、お母さんもわかっていなくてはいけません。それをもっとわかるためには、子供が幼児のうちに何とかしない限り、何ともならないのかないつも考えています。

また、大人で社会人になった人がお迎えに行くのに何を着るのかということですと悩

んだり、服装を批判されるのが怖くていけないとか、本当にくだらないのですけれども、そういう話を良く聞きます。

今はそんなことまでちゃんと教えなくてはいけなくなっているのです、その辺のことも、いろいろな集まりで幼児教育の専門家の方たちに親のファッションから話をさせていただくとか、ささやかなことで悩んで行けなくなってしまう人たちのために専門家からのお話、アプローチをしていただくことも大事なのかなと思います。

【広瀬委員】　これが、手前みそですけれども、感情の発達がいかに大事かということなのです。生重先生がおっしゃったような、気に食わないけれども仲間なのだということになっていくのが、ちゃんと型どおり感情が発達しているということなのですけれども、今の親御さんの中には、気持ちは気持ちとして、それでも仲間なのだとは切り分けて考えることのできない、感情の発達が1歳、2歳レベルで止まってしまっているような方もいます。今の話は、親の感情の発達が未熟だから子供もいつまでたっても発達するわけがない、ということのとてもいい例だと思います。そこをどうするかですね。

【長澤委員】　今、子育てサークルが自然発生的にできていますね。みんな子育てがわからない同士で自主的にやろうと言って、何か月かの子供を抱えたお母さんがつくる。小集団ですよ。そうすると、同じような年齢ですから、その中で、何だかだんだんテンションがおかしくなってくる。そのときに地域のどういう施設と連携していくかということだと思うのです。そういうルートが必要だと思うのです。

前に勤務した園では、そうして悩んでいるグループが相談に来ました。それで参観を勧めました。保育園ではそこら中でけんかしています。2歳児クラスは物を取り合って、殴ります。そういうときに保育士が仲裁するやり方、そういうものを見て行くわけです。何回か通ううちに、「あっ、どの子もこうなのだ」とか、「うちの子は異常ではないのだ」とか、「こういう時期はあるけれども、逆転してこんなこともあるのか」など、いろいろなことに気づくようになります。私たちは何も教えないですけれども、教えて講義をするというよりも見てもらう機会を提供する、そういうところの連携によってグループを少し長続きさせられるということもあるでしょうね。

【香月委員】　というか、そういう時期を何とかやり過ごせるということだと思うのです。うちの子はやる方で、2歳児でしたが、友達をかんだりバーンと突き飛ばしたりするのです。それを見るのがすごく嫌で、そのためにお迎えに行けなくなってしまうほどでした。毎日、毎日そうでした。保育士さんからは、「今彼は自分だけしかいないとっていて、

自分がすべて。自分というものが出てきたときなのだから、見守ってください。ここで怒ったり、絶対やめなさいと言ってその場を去ったりしたら、この子は発達しませんよ。とにかくまず自分というものを持たせなさい。」と言われ、励まされました。

今思えば一瞬だったなという感じですがけれども、本当に、本当にその時期はつらかったです。

1度親同士の話し合いの場を全員で持って、話し合いをすることになったのですが、そのときに私ですら「こういう人間関係面倒くさいな」と思ったのです。だからみんな、3歳になると、一切かかわらなくていい幼稚園に入れるようになるのだなというのがすごくよくわかりました。バスで「行ってらっしゃい」と言った瞬間から何もなくていい、全くかかわる必要がないのです。父母会もなければ、むしろ作らないでくれという状態なのだそうで、多分そのまま任せっぱなしという気分で小学校に入っていくのだなと思います。

【生重委員】 子供の現実を見ないから、自分の子が組体操の真ん中の上ではなきや嫌だとか、写真を撮るのに真ん中ではなきや嫌だ、どうしてゴールの真ん中でビデオを撮らせてくれないのかという話になるのですよ。

【香月委員】 ただ、話し合うまでは、クレームをつけた人は自分の子だけやられていると思っていたのです。歯形がついて帰ってくるので。自分の子だけがやられているのだと思っていたけれど、保育参加などもして、自分の子もやっていたということに気付いてからは少し楽になったということでしたけれど。でも、そのときに私も正直この話は面倒くさいと思ったから、そういうことをやらない園とか、お母さんは一切かかわらない幼稚園に入れたくなる気持ちはちょっとわかりました。でも、広瀬先生がおっしゃるように、その中で、もまれて親として育たなきやいけないと思って、あえてまたイバラの道に行くのですけれども。

【長澤委員】 だから、今の子はある意味で大人が介入するから、葛藤しないのですね。やって相手が泣いたら、例え1歳児でも、2歳児でも悲しいのです、自分のやったことが。それは言わなくても感じます。

【香月委員】 だんだん何ともいえない嫌な顔になってきたのです。

【長澤委員】 やった子も気づいているのです。そういうものを味わっていかなくいけないのに、他の子の気持ちに……。

【香月委員】 だんだん先生とか見るようになりますものね。「仲裁に入って。」みたい

な感じで……。だけれども、子供を見ていると、やった後にすごく嫌な顔、「あっ、何かやったな」という顔になったのです。ああ、「感情」というのはこういうことなのだなと思いました。

【長澤委員】 育つにはそういう場が必要なんだけど、今子供にその場が環境として用意されてないというところがありますね。さっきの「予防」でしたか、ああいう言葉にあったように、親が当たり障りなく育ててしまうので、子供は葛藤や痛み、いろいろ起こる感情などを経て成長していくということがなく、それがなされないから、人間が大変なことになっていくのではないですかね。

【香月委員】 今になれば、かまれたら痛いとかたたかれたら痛いとかいうのも、体で覚えた方がいいのかもと思うときもあります。

【長澤委員】 そうですね。

【鈴木部会長】 子供が主体という観点から言うと、子供は思い切り遊べる場が必要ですね。そういう意味では、あれしなさい、これしなさいというやり方ではなくて、環境として、よく幼稚園教育要領が言う「環境が保育士」という、まさに子供が自発的に、自由に、何かできる環境をまず用意していくということが大切だと思います。

【高橋委員】 今のお話を聞いてますますそう思ったのですけれども、小学校の立場からすると、我々が対象としているお子さんは年齢は6歳よりももっと上なのですから、学校に来られる保護者の方の中には、もっと低い年齢のお子さんもいる方がたくさんいらっしゃると思います。(5)の「地域で『子供の育ち』を支える取り組み」というお話の中で、部会長が言われたように、その地域、地域でさまざまな特性があるから、その特性に応じてということは確かにそうだと思うのですが、一方例えば本校の場合でいきますと、PTA組織の中に、成人部という組織があり、その中で親として、大人として、一般教養的にさまざまなことを学んでいこうという活動を、自立的にやっています。

小学校によってPTA組織の中の仕組み、組織は違うとは思いますが、うちの場合でいくと、そういった組織の中で若い保護者の方が、今のような幼稚園、保育園、あるいはもっと年齢の低い、それこそゼロ歳からの子供の発達特性やその親としての見方、受けとめ方、かわり方については、科学的な知見も踏まえるとかいうふうにする、あるいはこういうふうに見れば冷静になれるよとか、あるいは専門的なお医者さんに来ていただいて、発達特性ではこういうことがあるのですよということを、年にそう何回もできないにしても、研修をしています。こういったいろいろな教材も含めて、そういうもの

が動かせるかなと思っています。

選択肢の中に小学校が核になって、しかもPTA組織の一部に、それこそ親として、保護者として子供の育ちやかかわり方がどうあればいいかを研修するような、そんな仕組みができれば、少なくとも小学校であれば保護者の方は6年間いらっしゃいますし、PTA組織の中に位置付けておけば、けんかをしたから自然消滅ということにならないかなと、聞いていて思いました。地域に根づかせるという(5)の視点からするとややずれてきてしまっているので、違和感があるかなとは思いますが、そういった仕組みの中の一つとして、学校が核となって動き出すということは、選択肢の一つとして考えられるのかと思います。

【生重委員】 学校を取り巻く地域がやらなくちゃいけないのです。学校がやるとなると学校の仕事が増えるし、PTAがやるというと、私の経験上多分続かないと思います。私はPTA関係の方たちとお付き合いが長いのですが、私の子が入学する前後のころなどはまだ、上の方たちが、1年生や2年生の保護者会のときに幼児が来たら、空き教室で保育する部屋を自主的につくってくれたり、そういう自主的な動きがあったのですが、うちの子が入学するころにはだんだんフェードアウトしてしまい、PTAの運営委員会などでどうしてこういうものがなくなったのかという話が出てくると、怪我をさせたら誰が保障するのか云々という話になっていって、「何の保険にも入っていないのだからできっこないでしょう」という強い声に押されると、みんなしーんとなって、できなくなってしまうのです。

それに、本当に悲しいくらい、お互いに学ぼうという意識が足りないのです。だから、これをやると頭がよくなりますよとか、運動能力が伸びますよとかという、そういう「おいしいえさ」でつらない限り来ないのです。とても危険なことが起こったらみんな集まりますが、そうでない限り、日常の学びの中では「うちはうちよ」とみんな思っているのです。PTAに何十年もかかわってきて、まっとうにいてもだれも集まらない現実をどう変えていくかということをして十何年もやってきているので、学校が背負いこんだら、絶対現場の先生は、「とんでもない」という話になるはずだし、PTAだって、その時の執行部がいる間はできても、それが過ぎてしまったらできなくなるだろうと予測がつかます。

高橋先生の言っていることを否定しているわけではないし、高橋先生の一小では意欲的な人たちがいてできるのかもしれないけれども、他の区市町村のPTAさんのことをよくよく知っている立場からすると、かなり厳しかろうと思います。

だから、これから考えていかななくてはいけないのは、生まれてくる子供たちのことも考えて、何となく緩く、優しく、らせんをかいてずっと続けていける仕組みみたいなものを作る、というところだと思います。

そういう点からも、ファシリテーターを養成するという今回のことはとても重要だと思っています。アドバイスしてくれるお医者さんや専門家がいて、そういうファシリテーターを養成するところがあって、身近ないろいろな、例えば7か月の子には2歳のお母さんが、2歳のお母さんには4歳のお母さんが相談に乗るといような斜めの関係ができて、「大丈夫、いいのよ」とみんなが甘やかすばかりではない場所を、どうつくったらいいのか……。例えば現場を開放して、お母さんの保育園体験とか、幼稚園体験みたいな形で、もっとかかわる場をつくるなどして、「ちゃんと自分がそこへ身を運んで、よその子も含めて見ない限り、自分の子供が育たないのだよ」ということをなんとか広報周知していきたいですね。そういう環境の中で自分が現場感を持って子育てしてくれる人がちょっとずつ底辺に増えていくと、小学校に行っても役員をやるのは嫌だと言わない、春の保護者会のときに延々と2時間、3時間下を向き続けるあの時期を乗り越えるようになるのです。

【長澤委員】 今、生重さんがおっしゃった中で、私は前回もすごく思っていたことは、新米お母さんのことです。お母さんたちが赤ちゃんを連れて、高校生や中学生なんかと赤ちゃん体験させたときに、これまでいつも「だめだ。」とか「今の親は……。」とか言われてきたお母さんが、高校生、中学生に抱き方を教えてあげたり、また、自分より小さい子供を持つお母さんに「こうよ」と言えたりすることから自信を持っていくということがありました。常にお母さんは教えられる立場、あなたは未熟だから教えてあげるといわれる立場でよいはずはないのです。

【生重委員】 そうです、そうです。インプットしたことはアウトプットしないと定着しないという、それは勉強と一緒に、自分が一生懸命勉強したら、人に教えられるようになってこそ初めて定着する。それはどんな場でもそうなのだと思います。

【鈴木部会長】 坂井委員、どうぞ。

【坂井一之委員】 いろいろなケースがあるけれども、高橋先生も前の回のときにおっしゃいましたが、子供の感情の発育とか発達のとらえ方とか、これは、専門家向けにきちんとしたファシリテーターも含めて、既にかかわっている方たちにわかりやすいように、もう一回ちゃんとした指針をつくるということは大きな意義があると思います。あとは、保護者にあらゆる機会をついて渡す機会をつくるのですけれども、どうダイジェストして

わかりやすく、また捨てられずに読んでもらえるか、ビジュアル的にも漫画を使うとかいろいろあると思いますが、そういうことを考えていけないのかなと思います。ですから、新しい視点ということがさっき話題になりましたけれど、もう一度そこをきちんと整理して、どうやってこれを新たにつくれるかということも課題でしょう。それから、今いろいろな「場」について意見が出ていますけれども、ある程度想定されて見えてきたところもありますので、そこをどうつくれるかということですね。

また、やはり1人になるお母さんたちが多いのですが、ますますインターネットの時代になります。今こういう議論をしていますけれども、あと何年かたったら、そこからいろいろな手がかりを得ようとする人たちが、さらに圧倒的に増えると思うのです。ですから、これに対して今をスタート地点として、ホームページも含めてどういう支援サイトができるかということですが、いろいろ検証したり、紆余曲折していきながら、東京都の育児支援サイトはすごいぞというような形で育てていく視点も必要ですね。だから少し時間がかかると思うのですが、そういうものが作れるといいと思います。当然一方的な情報提供ではなくて、双方向性とか……。ベネッセのウィメンズパークではたくさんたまひよのチャットがあり、そういう会議室があつていろいろできるものがあるのですけれども、そこをどういうふうにしていくのかということもあります。

また、妊婦のときですね。赤ちゃんを生む前ですね。このときが比較的御夫婦とも時間も持てる時期なので、母親の視点もありますけれども、父親も含めて育児を考えたり、この時点でどういうサービスを赤ちゃんが受けたらどういうことが起こりますよとか、どういうサービスが受けられますよとか、おたくのエリアではこういうものがありますよとか、周知をするという意味ではすごくいい機会だと思うのです。出産までの父親教室とか、2人で来る場というのは今でもかなり参加がありますし、いろいろなイベントとか講演会とか、そういうものを催したときでも、おなかの大きいお母さんと御主人が来るケースは圧倒的に多いのです。どこまで賞味期限があるかはわかりませんが、初めて経験することなのでこれからいろいろ起こることについてわからないことばかりですから、しっかり読むし、いろいろな手がかりを得ようとします。その場をうまく使って、その中で「あなたの地域ではこういうことができますよ」などということを知るのは効果的だと思います。

それから、赤ちゃんを産んで家に入ってしまうと、その人たちに声をかけたくても、どこにどういう人がいるのかがわからないのが現実です。個人情報の問題はありますがけれど

も、いつ、どういう方が生まれて、どこにどういう人がいるかということは分かります。そこでの的確な、例えば1歳ぐらいになったときとか、あるいは2歳、言葉とかコミュニケーションの始まる頃とか、おむつがはずれる頃とか、そういう時期に何かのツールが届くなどということも考えられます。

いくら声をかけてもなかなか子育てで出てこない方たちとか、そういう方たちについてある程度補足できれば、妊婦の時代にいろいろな意味での周知をすることができるということと、適宜、タイミングに応じてのお知らせができますね。子供の月齢とかそこに応じて出てくる課題は、3か月ずれてしまうとまるっきり違うからトータルのものでやってしまうと無駄なところがあり、そこをある程度の確にできると効果的だと思います。それをどこまでやるかということですが、乳幼児期の幾つかの段階を選んで入学する前ぐらいまで、ですかね。

また、どういうツールをどう的確に、どのタイミングで、どういうルートで出せばよいのか、そのためにどういうふうにお母さんたちの住所やそういうようなことを的確に把握するかとか、課題はたくさんあります。それはどの場でやるのかとか、直接送るのかとかという問題もあります。健診をやっているときは予防接種とかそういう機会がありますので、そうするとやはり小児科とか保健所ですね。すごく大きな場所、場だと思えるのですが、そこでの確に子供の月齢に応じて何かを渡すことができますね。

もう一つ、メディアの立場からいくと、おなかの大きなお母さんたちを支援するような何か運動とか、楽しくなるような、お母さんたちにエールを送るような何かができるといいなと思います。サラリーマン川柳がよく話題になっていますけれども、結構笑えますよね。あれを読みながらサラリーマンも1日の疲れが、瞬間ですけれども、癒されたりする気がします。ママさんの子育て川柳みたいなものも募集するとたくさん来るのです。例えばそういうものを小冊子にして、「みんなこうやって苦労しているのよね」とか、「こんなことがあったよね」とかというようなことで、マスコミの話題になる、あるいはマグネット式に作って子育てがつらくなったときには4箇所ぐらいの川柳を冷蔵庫にぺたんと張れるようにしておくとか、多分アイデアレベルではたくさん出てくると思うのですが、そういうものがあるといいのかなと思います。

【広瀬委員】 やはりウェブの使い方というのはとても大事だと思うのですが、僕はとてもいいなと思うのであえて固有名詞を挙げますけれども、読売新聞の中に「大手小町」というサイトがあるのを御存じの方いらっしゃいますか。何か困ったことがあって

掲示板に投稿しても、掲示板はちゃんと誰かが管理していないと、一般的には、結構荒らしが入りますし、誹謗中傷が入ります。やはりちゃんとした管理者がいないとうまく機能しないと思うのです。

読売新聞の「大手小町」というサイトは、新聞社でちゃんとマネジメントしている人がいて、投稿されたものが必ずしも全部反映されるわけではないのです。ちゃんと記者さんが目を通して、あまりに不適切なものは削除しますというお断り書きがしてあります。例えば兄弟間で仲が悪くて困っていますという投稿があると、いろいろな意見が出るのです。本当に様々な意見が通ってきていて、それを見て、「あっ、答えは1つではないのだな」ということにも気付きます。しかも記者さんの目がちゃんとあるというので、皆さんそれに遠慮して書いていますし。

ウェブの運営ってものすごく難しく、野放図にてしておくとうまく結局つぶれてしまいますが、その管理をある程度だれかわかる人がすると、とても有効な手段だと思います。

その辺が一つと、それと関連して、どうも乳幼児教育ファシリテーターというものの概念がいま一つよくわかりません。

特別支援教育の場にいる人間として言いますと、今特別支援教育コーディネーターというものがありますが、初めに概念ありきで予算があって、現場にいる人間は、では、何をしたらいいのかと非常に困っているのです。ですから、これも、「任命はされてみたものの、何をやるの？」みたいなことになってしまうともったいないので、是非、初めに概念、予算がありきではなく、こういうことがあり、このようにしていけばいいのだというものをつくってってもらいたいと思います。本当は全員の親がファシリテーターになれるようなシステムをつくるのがむしろいいのかなという気もするのですが……。そんな思いつきを2つお話ししてみました。

【鈴木部会長】 ありがとうございます。

それでは、具体的な概念の方で。香月委員、いかがでしょう。

【香月委員】 この前、スイカ割り大会を夏の夕方4時から地域で開催したところ、口コミで生後1か月から6年生まで50人くらい集まりました。そのときに遊んでいるお兄さんたちに駆け寄っている1歳児、3歳児、3年生を見て、初めて親たちが「こういうのはいいね」と言い出したのです。初めて言ったのです。「こういうの、いいじゃない。異年齢って、こういうことなのね。」と。異年齢が大事だとか何とか口では言っても、親自身も現場を見ていないのです。だから、さあ、勉強会をしますと。異年齢が大事、脳への発達

にいいから勉強会をしますと言っても、申しわけないけれども多分集まらない。

前回の先生の御発言で、早起きが大事だということをみんな知らなかったからあのハンドブックがあんなに盛り上がったのだという話をされていて、そうなのだよねと思いました。保育園の保護者会などで言われれば、ああ、そうかと思って早寝早起きを一生懸命やるけれども、2歳、3歳くらいになると、子育ては自分でできると思うのです。だから、そういうお母さんたちをどうやって集めるかというのは、まずアクティビティーを通した形で集めていかないとなかなか厳しいと思います。

また、課題がもう1つあります。参加者のうち0歳児は全部お兄ちゃん、お姉ちゃんがいる0歳児だったのです。自分は子供が0歳のときにそういう場に連れていったかと考えると、ちょっと厳しいなと思ったのです。そこを、0歳の子しか持っていない親にどうやって参加してもらおうか……。

「抱っこさせて」とか言っている、その楽しさをそういうところで味わえるといいなと思ったのです。それで楽しいなと思ってもらって、何回目かに勉強会をやりたいなと思ったところです。

【生重委員】 まず最初におもしろくないと来ない。

【鈴木部会長】 それは各地域共通だと思います。

【生重委員】 そうです。それと、長くたくさん教えられるというのもだめです。

【生重委員】 20分とか、1年生に机に着かせるのと同じ感覚でやっていかないと、「まだしゃべるの」とか言うのですよ。だから、おもしろい話を10分とか、ちょっと得しちゃったというところから始めていかないとだめです。

【鈴木部会長】 そろそろまとめないといけないでしょうか。

【主任社会教育主事】 御意見としてはいろいろなものが出ていますので、こちらでも少しまとめながら、また先生と今日の経過も踏まえながらお話をし、全体会へ向けていこうと思いますので。

【鈴木部会長】 はい。では、少し整理をしていきます。

【事務局】 大枠として事業展開のイメージとして共有していただけるかどうかということをお確認いただきたいということと、あとは具体的にどういうふうに展開していくかということとはまさに、本当にその地域の実情に応じて、ということを強調して考えていきたいと思っています。ファシリテーターということも仮にこれを置いたのであって、認証して何かを出してやってくださいなどというそんなかた苦しいイメージではなくて、実は

行政のいろいろなシステムの中に収まりきれない問題というのが地域の中で多分いっぱいあるのです。そういうすき間を埋めていくような、横につなげる役割を当事者的な立場からできる人という考えです。

【広瀬委員】 コーディネーターという方が、僕はイメージが合うのですけれども。

【事務局】 コーディネーターというのはその場の中に身を置きながらやるというよりも、どちらかいうと一歩引いたところで問題を見て、調整をするというイメージでとらえたのです。それに対してファシリテーターというのは、基本的にはその現場の中に自分の身を置いて、そこの中でその人たちと協同の関係をつくりあげていく人というように一応概念的には分けて、あえてこちらの言葉を置いています。ただこの言葉自体がいいかどうかというのはまた別なのですけれども、一応そのような意味合いに分けて、コーディネーターとファシリテーターということを考えています。その定義が正しいかどうかというのはもう一回調べなければいけないのですけれども。

【広瀬委員】 それでイメージはよくわかります。

【事務局】 ですから、広瀬先生が先ほどおっしゃったような、「全員の親がファシリテーターになる」というところが我々のイメージとまさにフィットします。抽象的な言葉になるとかた苦しい感じになりますけれども、どちらかいうと当事者性を一部兼ね備えた方たちに地域における関係づくりを、つなぐというふうに長澤先生はおっしゃいましたけれども、その役割を果たしてもらえるような作り方を考えています。

例えば養成の仕方にしても、「地域の実情に応じた」ということを強調しています。都で応援はしますけれども、何も都の機関にやってきて学ぶということをイメージして出しているわけではなく、例えば都立学校だっているいろいろな地域に配置されていますから、そういう施設を地域の中でうまく生かして、そこで学ぶ場をつくっていくというようなことも考えられるだろうということです。ですから、養成自体は区市町村レベルで展開されていくべきだろうということ考えのもとに、区市町村レベルの取組の（6）として置いているということがあります。

【主任社会教育主事】 部会長、一応（5）から議論に入ったのですけれども、他の部分についても御意見をいただきましたので、この後は部会長と事務局で調整しながら、資料1と2のまとめにしていきたいと思います。今日、オブザーバーで太田委員がお見えです。

【鈴木部会長】 そうですね。お忙しい中ありがとうございます。

【主任社会教育主事】 少しおくれられて、前半のところが見えにくい部分はあるかと思いますが、少し、特に（５）の部分などについても御意見をいただければと思います。

【太田委員】 今度の全体会に出られないので、どんな議論がなされているのかのぞかせていただいたのですけれども、非常に白熱した議論で、勉強になりました。第１回目の審議会のときに私がちらっと言ったようなことが大体コアに座りながら動いているので、１つは、すごく安心したという部分があります。

それから、もう一つ、この前の第６期の、あるいは第５期の審議会からの流れからのイメージでいくと、今日の議論を聞きながら思ったのは、幼児家庭教育版の地域教育ネットワークの議論をされているのかなという感じのイメージがありまして、もしそうだとすると、これまで５期、６期の部分ではいわゆる学校教育との絡みで地域教育プラットフォームを議論してきたわけなのだけれども、幼児家庭教育の場合には学校に相当する部分、その部分が欠けている状況の中で、こちらの議論だけで果たしていいのかなというような気がいたしました。

それから、もう一つ思ったのは、いろいろな理想、あるいは、インセンティブというのは確かにあった方がいいにこしたことはないでしょうが、もう一方で、恐怖感みたいなものを与える方が人は動くという——例えば、企業などで、より高見を目指すというときのその組織の改革力よりも、もう倒産するよ、生き残れないよというときの復活に向ける力の方が、みんな必死になって頑張るので成果を出す——といったような部分があって、「現状のままではあなたの子はだめになるよ」とも言えるのであれば、その方がよっぽど影響力を持ち得るのではないのかなという、そんな気がしました。

また、各家庭は、幼児期から教育費には相当な費用を投入しているのだろうと思うのですが、どうもこれが分散投資になっているのではないのかと思います。これをうまく集約化できないでしょうか。そうすれば、先程の話ではないけれども、プラットフォームにおける学校に相当する、コアにあたるものがワークするようになり、それを支える地域教育プラットフォームと、それが両輪でかなりいい絵が描けるのかなという気がしました。勝手な感想で申し訳ないですけれども。

【鈴木部会長】 ありがとうございます。

それでは、事業展開のイメージを共有したということで、よろしいですね。それぞれの地域性に合わせた上での都レベルの取組ということで柱が４つあります。乳幼児期からの子供の発達が主体であって、そこから出発して、それを取り巻く教育関係者、保護者向け

のプログラムを開発していくということです。そして、当事者としてのファシリテーターを育成していく。そのための具体的な今後の養成プログラムを必要とするということで、そのほかウェブサイトもうまく活用しながらやっていくというようなことでよろしいでしょうか。

それでは、どうもありがとうございました。私個人がおくれてしまって大変申しわけございませんでした。

それでは、最後に日程等について、お願いいたします。

【主任社会教育主事】 資料3に今後のスケジュールがございますので、御覧ください。

既にお知らせしてありますが、9月26日火曜日、午後6時から8時に第2回の全体会を開きます。場所は特別会議室27となっておりますが、改めて通知を出させていただきます。第2回の全体会において、専門部会からの報告を行う予定です。幼児・家庭教育専門部会報告については、事前に専門部会の委員の方々に送付して、内容について御確認いただく予定になっております。

その他、第3回は10月19日で今調整しています。第4回が11月で日程調整中になっております。第4回の全体会で、この部会の審議内容をまとめたものの第一次報告を予定しております。

以上です。

【鈴木部会長】 どうもありがとうございました。

以上をもちまして、第3回専門部会を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

閉会：午後8時27分

— 了 —